

特集Ⅱ 追悼：鑪 幹八郎先生

鑪先生を偲ぶ

濱 野 清 志

京都文教大学臨床心理学部教授

2021年5月7日、本学名誉教授であり、前学長でもある鑪幹八郎先生がお亡くなりになった。本号では、鑪先生にゆかりの先生方に、先生がたの追悼の言葉をお寄せいただき、特集を組ませていただいた。先生方のお言葉とともに、本学で鑪先生との縁を結ばれたすべての方々の先生への感謝の気持ちが天上の鑪先生のもとに届き、鑪先生が満面の笑みを浮かべて安らかにお眠りになれることをここからお祈り申し上げます。

さて、鑪先生の思い出を私ごとながら、ここに少し書き綴っておきたい。私自身がまだ大学院の学生だった1980年代のはじめ、当時広島大学におられた鑪先生が京都大学に集中講義に来られ、講義のあと、河合隼雄先生や山中康裕先生と大学院生の総勢20名ほどで開いた先生の歓迎会に同席させていただいたのが初めての出会いであった。河合先生の周りには女性が多く集まり、鑪先生の周りには男性が多い。これはユングとフロイトの違いをそのまま引き継いでいるのか。そんな冗談を語っておられたのは、鑪先生だったか、河合先生だったか。

その後、私が修士論文で先祖イメージとアイデンティティの関係を議論しようとしていたとき、図書室でいろいろな雑誌論文を漁っている中で、ふたたび鑪先生と出会った。日本人のアイデンティティのあり方の特徴として「根こぎ感」を議論した論文だった。エリクソンが提起したアイデンティティ議論は、非常に大雑把にまとめてしまえば、当時のアメリカ人が伝統文化を背景に持たず、未来に邁進するフロンティ

ア精神の中で、いかに自分の根っこを育てることが重大問題か、という議論だと私は思うが、エリクソンに惹かれ、アイデンティティの研究を追求してこられた鑪先生の議論の出発点もこの「根こぎ感」であった。

アメリカ人とはまた別の意味で、日本人としての時間的流れがいったん断ち切られた第二次世界大戦の敗戦後の日本で、私たちはどのような根を育てなおすことができるのか。このことが、鑪先生の研究のテーマでもあり、心理臨床の原動力だったのだらうと、今振り返ってみて強くそう感じる。

三度目に鑪先生にお会いしたのは、あれはたしか九州大学で日本心理臨床学会が開かれたとき、その広い会場の外、箱崎キャンパスの一角であり人が多くいないところであった。一人静かに一息ついていると、そこに先に一人で佇む先生がおられた。ご挨拶をすると、名前を覚えておいて下さったのでとても嬉しい気持ちになったことを覚えている。そのときの鑪先生はとても素敵な笑顔をしておられたように記憶している。

それから数年後、京都文教大学に私が着任してから、同僚として、対等に対して下さった。

鑪先生は、本当に一生懸命になって心理臨床家を育てることにその身を捧げられたのだと側にいて感じる。先生の思いの本質を私たちも忘れることなく深く受け継ぎ、今度は私たちなりのスタイルをもって、次代にそのバトンをつなげていきたいと思う。